第１０回大会 写真特集

米・ビバリーヒルズで ひむかかるた大会開催

2月19日（日本時間2月20日）、アメリカ・ロサンゼルスのビバリーヒルズにある高級ステーキレストランでひむかかるた大会が催された。米国宮崎県人会の新年会。ここでひむかかるたがアトラクションとして大々的に取り上げられたのだ。参加者は約40名。多くは第二次世界大戦後の移民だが、やはりそこは宮崎県民。黒木、長友と言った名字のメンバーが並ぶ。30分ほどの催しゆえルールは簡略化されたが、その代わり新井克弥関東学院大学教授（ひむかかるた協会）が、随所で読み札絵札の説明を行った。県人会の人々は、かるたを楽しみながら太平洋の向こう側の故郷に思いを馳せたのだろうか、大会は異様なほどの盛り上がりを見せていた。県人会会長のジョージ森さんは「今年は食事でだけでなく、思い出でもおなかがいっぱいになった」と感慨深げ。ここ米国でも宮崎を思う心は地元と代わるところはないようだ。

念願の頂点

激しい戦いの末、優勝を手にした松本さん

悔しさバネに練習励む
個人戦優勝の松本（穆佐）

昨年度、上位を争っていた小学生が卒業し、次の王者が誰になるのか注目が集まっていた個人戦。優勝は接戦を勝ち抜いた穆佐小6年の松本彩香さんに輝いた。

松本さんがひむかかるたクラブに加入したのは4年生の時。5年生になって初めて大会に挑んだが、決勝リーグの1回戦で敗退。その悔しさをバネに昼休みにひたすら練習を積み、「目標は優勝」と努力をしてきたという。

予選Dパートを2位で通過した松本さんは決勝1回戦、準決勝を順調に突破し、夢見た決勝戦の畳に立った。しかし、優勝は容易いものではなかった。対戦相手の谷口烈翔さん（大塚小6年）とは、札を取れば、すぐさま取り返される激しい攻防が続いた。試合中、松本さんは何度も「勝てる、勝てる」と心の中でつぶやいたという。終わってみればかるたの枚数は同数で、結局「な」札を持っていた松本さんが念願の優勝を果たした。

3月で小学校を卒業する松本さん。先日、入学予定の中学校で催された交流会でひむかかるたを知っている人が少なかったため、「4月からの中学校でもひむかかるたを広め、機会があればやりたい」と語った。

かるたを「歌う」ー読み手・高橋奈央

ひむかかるた大会の盛り上がりを作るうえで欠かせないのが「読み手」の力量です。札のとりやすさ、リズミカルな試合の流れ、そして、クライマックスの高揚感。それらをどう作り上げていくか――過去10回の大会の中では、様々な読み手たちが、工夫を凝らしながらこの難題に挑んできました。今回は、第10回大会で通算3度目のの読み手をつとめた高橋奈央さんに、思いをつづってもらいました。

※　※　※　※

数年前も、私はひむかかるたの大会で読み手を務めた。当時、読みが安定せず、声がぶれることの多かった私は、読みのリズムを大事にすることに重きを置いた指導を受けた。だが、私の中には腑に落ちぬ何かが残った。

第10回目の今大会、再び私は読み手としての機会を得た。私は、ここで数年前に探していた答えを見つけた。その答えとは、かるたが「歌」であるということだ。札一つ一つに込められた意味を意識して、私は「歌った」。私は大のカラオケ好きで、ここ数年、腹式呼吸と曲の雰囲気に合わせて緩急をつける練習をしていた。その練習のおかげか、声に余韻を持たせやすくなり、リズムを保つことと、読み札の意味や情景を表現することとの両立に成功した。

読み手の仕事は、読み札を競技者が聞き取りやすいように大きな声で、かつ安定した試合の流れを作り上げるために一定のリズムで読み上げることだ。だが、読み札の短文には、作者によってそれぞれ意味が込められている。それを更に表現する―「歌う」ことこそ、真の読み手の役目ではないか、と私は思う。いわば、読み手とは「歌い手」、吟遊詩人なのではないか、と。

来年、機会が頂ければぜひ大会でまた「歌い」たい。今大会で得た気付きを、また更に次に生かせたらと思う。

（宮崎公立大学卒業生・高橋奈央）

生目台幼稚園

うちやまこども園